

中国における新型観光—「農家楽」に関する考察

A Consideration of Chinese new Tourism type —Agri-tourism

TANG Li min

湯 麗 敏

表題のタイトルを巡って、八つの部分に分けて考察を行った。1はじめに、2「農家楽」の発展背景、3「農家楽」の特徴分析、4浙江省の長興「農家楽」の事例、5「農家楽」の持続発展の可能性について、6目下「農家楽」の発展における問題点および今後の課題、7「農家楽」の持続発展を確保するための対応策、最後は、結論という内容で小論をまとめる。

キーワード

農家楽 農業 農村観光 体験 自然

1. はじめに

2017年4月11日に中国の浙江省で「全国レジャー農業と農村観光(新華網2017-04-11)」[1]をテーマとした会議が開催されたことが新華社によって報道された。

中国政府農業部の部長である韓長賦氏は、その会議で「都市部の住民と農村部の住民たちの経済収入の向上と共に消費構造も絶えず拡大することによって、レジャー農業と農村観光の需要は、ますます旺盛になってきた。都市と農村の一体化の進展により、農村のインフラ整備と公共サービスのさらなる完備が推進され、農村のきれいな山、川、美しい風景が観光客を引き付ける魅力となっている。」と発言した(韓長賦2017-4-11)。[2] (筆者訳)

実際、農業部の最新データでは、「2016年中国農村観光とレジャー農業に関して、接待を受けた観光客数は延べ21億人、営業収入にして5700億元、観光に従事する従業員が845万人になり、それによる利益を受けた農民の数が672万戸に達した(光明日報2017-04-12)。」[3]という結果が出ている。今、レジャー農業と農村観光の推進により、農村部の生産、農民の生活、自然環境の生態における多方面での改善見込みが十分あると多くの人々が予想している。

「2016年、観光業が国民経済に対する貢献度は11%に達し、観光業の総収入が4.69万億元になり、国内観光客の延べ人数が44.4億に達した(馬誉峰2017-03-08)。」[4]さらに、中国国家旅遊局の統計によると、「目下全国都市住民の週末・休暇及び祝祭日に行く観光の目的地の70%以上で、周辺の農山村が選ばれている(湯麗敏富山国際大学紀要第9巻p133~140)」という。[5]年間の国内観光客の延べ数が40億人を越えた世界随一の市場において、農村観光は、明らかに中国国内観光市場では大きな柱になる観光商品に育ちつつあると言えよう。

レジャー農業と農村観光における最も典型的な娯楽スタイルとして、「農家楽」というスタイルがあり、すでに中国全土で急激に浸透しつつある。農村の地域づくりにおいても、注目されるポ

イントになっている。中国国家統計局の統計によると「全国の農家楽の数がすでに 150 万軒を越えており、年間農家楽を訪れた観光客の数が 9 億人あまりになり、中国総人口の 60%を超えている（三農中国報道 2015-6-1）。」[6]が示されている。

このような背景のもとで「農家楽」は、なぜこんなに観光客に受け入れられるのか、何が観光客を引きつけられるのか、「農家楽」の発展背景及びその特徴は、一体何なのかについて考察しながら問題点を明らかにしたい。そして具体的な事例について分析を行い。それにより、「農家楽」の今後の持続発展の可能性を見出して、さらに残っている課題やあるべき改善策の考察を小論にまとめたい。

2. 「農家楽」の発展背景

2.1. 求められる観光の多様性

中国の都市近代化の進展にしたがって、都市部の経済活動は、以前よりも健全に拡大を続けており、個人の可処分所得も次第に増えてきた。そして、人々が日常生活からぬけだして、観光に出かけようという意欲も一段と高まってきている。一昔とは違い、物質的な満足感を求めるだけでなく、精神的な充足感を求め、旅行に対するニーズは日増しに多様化しつつある。さらに、従来型の物見遊山あるいは、見学的な観光形態から、より地元密着型、体験型の観光を消費者は求めるようになってきている。観光の「質」を重視する人が増えてきていることは間違いない。そこで「農家楽」というタイプの観光形態は、それぞれの年代層、消費レベルが違っても気楽に受け入れ易い、特に観光の多様性を求めている消費者にも、対応できる新型観光のスタイルとなっている。

2.2. 都市部住民の生活環境の悪化

市場経済のシステムが導入された後、都市部人口の増加傾向が一段と高まってきている。一方、工業生産の規模が徐々に拡大するにしたがい、工業生産によりもたらされる公害や、都市部にどんどん増えている。自動車の排気ガスによる空気汚染も相当ひどくなり、町中では層ビルが林立するなか、都市急激な現代化の代償として、都市部住民は、常にコンクリートの中に閉じ込められているという息苦しい暮らしを強いられることとなった。そんな都市部住民にとって、農山村の澄んだ空気を吸い、山、川、田園からなっている美しい自然の景観に触れたいという欲求も日に日に高まっている。「農家楽」へ行けることは、多くの都市部住民にとっては、日ごろ得られない安らぎと豊かな自然への楽しみとして、贅沢な時間の過ごし方の一つと見られている。

2.3. 自然への旅、自然の中で求められる観光

長い間、中国の観光商品は画一的で、もはやそれでは消費者を惹きつけることはできなくなってきた。魅力があり新鮮な感じを得られる観光商品を多くの人が求めた結果として、「農家楽」というスタイルが生まれた。「農家楽」は都市部からそんなに遠く離れていない距離にありながら、それを利用すれば、観光のほかに、農業体験や、普段とは違った人と触れ合うことができ、そうした非日常を体験し、そこでリラックスをしながら心なごむ楽しい休日を過ごすことができるということを都市部住民は歓迎した。

大阪成蹊大学マネジメント学部の教授である多方一成氏は、グリーン・ツーリズムの概念について「都市住民が農村の豊かな自然や美しい景観の中で、休養はもちろんのこと、地域の人々や文化との触れ合い、農作業体験、自然体験・観察などをするといった広い意味での『自然への旅、自然の中での観光』（多方一成、2013年 p. 37）」[7] と解釈している。

中国の「農家楽」が、ますます多くの都市住民に受け入れられているのも、まさに安心して自然への旅、自然の中での観光ができるということにある。そしてそのような認識が多くの人々に次第に定着しつつある傾向が見られる。

3. 「農家楽」の特徴

「農家楽」が存在しているところという、必ずと言ってもいいのが、田園風景の中にあることが必須条件となる。観光客がそれを利用して、日常と違った体験をしながら、農村観光を楽しむ。「農家楽」は、観光客に手頃な食事、宿泊、体験事、観光などのサービスを提供するいわゆる新型の観光形態である。農村観光による役割について宮崎猛氏による次のような指摘があった。

「農村経済構造の調整、新たな生活要求の充足、農業の付加価値の向上、農村の内発的発展、都市農村交流、農民の価値観の変化などがあげられている。（宮崎猛、2006年 p. 129）」[8]

「農家楽」は、中国では農業観光の分野においては、まさにこのような役割を果たしている。訪れた観光客の農村風景と自然を楽しみたいというニーズにどの「農家楽」も極力応えようとしているのが、今の実態である。

「農家楽」の基本的な特徴

3.1. ありのままの農村生活体験

「農家楽」は、農村・農業・農民いわゆる固有の「三農」の資源を十分に利用して、殆どの「農家楽」は、農民が個人で経営している。利用者にとっては、それが普通の観光と違って、農村の自然景観とそこに生きる人々の日常、そして郷土文化が一体となって溶け込んでいる観光の場がそこにある。普段はなかなか見られない農村の風景、触れ合う機会のない農民の生活、日常においては体験することができない農作業という仕事について、「農家楽」を通して、学ぶことができ、未知なる体験する。

「農家楽」は、人為的に作った景観ではなく、自然の中にあり、既にそこにある風景である。自然の田園風景の中で、観光客にとっては、ありのままの農村生活と独特な地域色濃い文化を体験ができることが、一番の楽しみなのである。

3.2. 農業豊作を楽しみながら、農耕文化を学ぶ

「農家楽」を利用して、楽しさがなければ面白くない。一般的には都市部では体験ができない農作業の体験ができることが多い。例えば、野菜や果物の摘み取り、収穫、魚釣りなどの生産労働に参加したり、新鮮な農産物、特に無農薬で栽培された野菜など、その場で味わうことができる。なによりも農業豊作を楽しめることのほかに、農村生活を自らの体験を通して伝統的な農耕文化を知り、身近にある農村、農業、農民という「三農」問題の解決の必要性について一層理解できるようになる。

3.3 経営スタイルと利用者

「農家楽」は、それぞれの個人農家を単位に、自宅の私有財産を資本にして、例えばそれぞれ日ごろ持っている稲作地、畑、農機具、農産物、家屋、自家用車などを利用し、家族全員の力を合わせて、訪れた観光客に心なごむ家庭雰囲気味わえるような場所を提供することが「農家楽」の目指す目標である。

利用者の大半は、都市部に住んでいるサラリーマンや生活の質を高めたいインテリたちおよび充実した老後生活を楽しみたい年金生活者である。彼らは「モノ」より、落ち着いた、人に安らぎ感をもたらす自然の魅力を求め、さらに農村生活の体験、農村景観を楽しみたいという共通点を持つ人たちである。

4. 浙江省の長興「農家楽」の事例

上海から車で190キロほど離れている中国の浙江省湖州長興には「農家楽」が数多く点在している。山に囲まれている美しい自然の中に村があり、そこは、中国のお茶文化の発祥地ともいわれるほどの悠久の歴史を持ち、文化的雰囲気の色濃いところとして知られている。

「ここ数年以来、村全体で農村観光に力を入れており、農民が経営している「農家楽」の数は、約400軒あり、ベッド数にして2万床、従業員は3000人余りいる（『携程攻略』2014-10-20）」[9]にまで発展してきた。

2017年の春に行った聞き取り調査で、この地域にある「農家楽」の数が550軒程度まで増え、年間利用客数が330万人以上になっている。そこを訪れる観光客の大多数が上海や浙江省、蘇州安徽省からの観光客であった。そのうち、自家用車を走らせて上海からやってきた観光客の数は、60%以上を占めていたことがわかった。

長興の「農家楽」の特徴及び人気がある理由

4.1. 優れる立地環境

人気の理由として美しい湖と山に恵まれた自然景観の大変美しい所に立地することが挙げられる。村の住民は環境保護の意識を強く持ち、廃棄物、生活ごみ、汚染水の処理にも力を入れており、観光客がそこできれいな空気を味わえることが一つの売りとなっている。

4.2. 食事が美味しい、豊富多彩な体験が可能

都市部での日常暮らしでは、なかなか口に入らない地元産の無農薬の新鮮野菜、地元住民の庭先で飼われている鶏、近くの川に飼われたアヒル、地元の農民が養殖した魚などの新鮮で美味しい食材を使った食事ができ、特に健康志向が強い観光客に喜ばれている。

レジャー、娯楽活動も可能であり、カラオケ、卓球、将棋、マージャンなど、楽しめる施設も完備されている。

興味があれば、農作業の体験がいつでも可能である。例えば、農産物の収穫、野菜、果物の摘み取り、魚釣りなどの体験が随時できる。

4.3. 利用しやすい宿泊施設と手頃な使用料金

村にある「農家楽」の宿泊施設は、五年前までは、ほぼ同様な規模であった。一室に二人ないし三人が宿泊できる。ここ数年来、政府の支援政策により、「農家楽」の数が増えただけではなく、その規模も次第に大きくなり、宿泊設備も改善されつつあり、いっそう利用しやすくなっている。

複数の訪れた観光客から聞いた満足した点を挙げると、「簡素な部屋には、エアコン、テレビ、トイレ、シャワー室があり、清潔さが保たれている。一方、環境保護を重視するために、洗面道具は、利用者が持参することが原則である。一日三回の食事が提供されるにもかかわらず、使用料金が高くない。青々とした山と川がある美しい自然に恵まれている「農家楽」での観光費用は、一人に1泊と一日三食を含めて、わずか80元ほどである。昼食と夕食は、10人で一つテーブルを囲む場合、12品の料理が出される。(聞き取った観光客の声)。」

その1泊三食の利用価格を日本円に換算すると1300円程度に過ぎず、訪れた観光客にとってはまさに安価で手頃な価格と言えよう。

都市部住民、一般のサラリーマン、年金生活者にも払える価格水準に抑えられているということで、より多くの観光客を惹き付け、多くの人が気楽に「農家楽」を楽しむことができるのである。

4.4 「農家楽」を経営におけるやり甲斐

「世外茶園農荘」[10]という「農家楽」の女性経営者である夏氏の話によると、今経営している三階建ての「農家楽」の建物は、地元政府が出資で建てられたもので、賃貸の形で毎年決められた家賃を払い、観光繁忙期に5名のパートさんを雇い、普段の場合に夫婦と二人の従業員ですべてを営んでいる。毎日接待する観光客数は、平均にして、約60名～70名ぐらい。夏氏の年間収入のうち可処分所得は、20万元程度とのことである。

長興では、このような新型観光としての「農家楽」は、盛んになりだしてから、十数年しか経っていないが、今や地元の農村観光、レジャー農業の発展に大きな役割を果たしている。そこでは観光業に所謂欠かせない「食、宿泊、交通、遊び、ショッピング、娯楽」というもてなしのサービス形態が形成されつつある。「農家楽」の振興により、村全体の観光業が繁栄になり、地元の経済の振興と発展にも繋がった。長年よそへ出稼ぎをした農民たちもどんどん村に戻り、観光業に従事し始める現象も起きている。現在一般村民の年間可処分収入は、最初の5000元からすでに20000元ぐらいに上昇してきている。

「農家楽」を経営している夏氏によると、今の事業の成功ができたのは、ほかの地域と違ったやり方をしっかり守ったことによるものだという。

それについて2018年1月19日中国新聞網によると、長興の「農家楽」の経営は、まず「観光商品の『郷土化』」、つまり地元の特色を十二分打ち出すこと。お茶の文化及び特色がある民俗文化により、特色ある観光商品を発展させる。それから、おもてなしのサービスが『組織化』、地元政府及び観光機構の指導の下で、農家楽協会の設立、それにより観光客に対する接待や出迎え、見送りなどのサービスは、統一的に手配される。さらに環境の場合は『景勝地化』にする。要するに、「農家楽」がある場所をすべて綺麗に整備し、農村観光、レジャー農業に相応しい環境づくりの努力が、全体的に一つの景勝地へと変えた。

2017年、長興の「農家楽」は、延べ315万人の観光客を招き、村の「農家楽」という形態の観

光収入が 7.9 億元に達し、「農家楽」を経営している農家の平均収入は 30%を増えたことによって、長興では、地元の特色がある農村振興の道が切り開かれた。」[11]という報道があった。

上述のことで、今、浙江省の長興「農家楽」が大変人気が出ている理由がわかった。もちろん問題点と改善点が多数存在しており、持続発展していくためにも、自発的な改善取組は不可欠であるとする。 (ここでは省略)。

5. 「農家楽」の持続発展の可能性について

中国における新型観光である「農家楽」は、近年来、速いスピードを持って、全国範囲で広がりを見せており、ますます多くの観光客に受け入れられてくる。どうしてこのような新型観光が生まれられるのか、理由を幾つか検討する上で、「農家楽」の持続発展の可能性について取り上げる。

5.1. 「農家楽」の発展は、時代の発展に合った必然的な結果

中国ではかつて長い間、計画経済政策が実施されてきたが、市場経済のシステムを導入して以来、社会経済活動の自由度は、飛躍的に上がったが、経済活動の活発化の代償として、都市人口の過密、無機質な高層ビルの林立、毎日広い範囲での交通渋滞、環境汚染、大気汚染などの諸問題も顕在化している。

一方、21 世紀に入ってから、人々は、自然環境の保護を重視し、人間が暮らしている地球を守ろうという意識がだんだん高まるなかで、「農家楽」という観光形態は誕生した。時代趨勢にのってきた「農家楽」の発展は、強いて言えば、それがレジャー農業と農村観光の発展における天と時、地の利、人の和が合った必然的な結果であろう。

近年来「農家楽」の発展は、確かに観光業及び衰退化しつつあった伝統的な農業振興と活性化に一役買っている。「農家楽」は、有効に農村資源の循環利用を実現できる新型観光形態であり、現代人の、自然の調和と共存に対する欲求に合致したこととして、ますます注目されるようになっている。

5.2. 「農家楽」は伝統的な大衆観光と本質的に違う

「農家楽」は、「農村・農業・農家」という郷土色が強調された観光形態なので、農村文化の伝承と保存、さらに開発と普及には積極的な意義を持っている。そしてレジャー、体験活動を主に、自然の中にある田園風景、正真正銘の田舎生活を楽しめる、独特な地域色がある農村文化が強められた「農家楽」の体験により、都市住民の自然を求め、農村文化と民俗風情を体験したいという希望に応えられるので、「農家楽」は、目下中国では大変人気がある観光商品の一つとなっていると言える。

「農家楽」の発展は、中国農村経済の発展にも大きく寄与している。経済の発展が進んでいない農村部だからこそ、経済の発達地域よりも自然景観、自然環境が保たれていることもまた事実であり、それらのすべてが価値ある観光資源になる。

5.3. 経済効果と文化交流にプラスになる「農家楽」

「農家楽」の発展により、農村経済が振興され、農民の仕事が増え、それに伴い収入も大幅に増え、農村全体が、政府行政の補助に頼らずに貧困状況の改善を達成している。都市部の住民が「農家楽」を訪れることにより、お互いの交流が促進され、都市文化と農村文化が交わることは、経済的な利益をもたらすだけでなく、農民の生活習慣と固有の価値観、意識などを良い方向へ転換させる効果も見られた。中国経済網記者魏永剛氏によると、「多くの都市部住民が訪れることにより、身近な交流を通して、農民のモノ事に対する考え方も発想法もだんだん変わりつつある。また視野も広がり、心から外部との交流を求める意欲が強くなり、自ら自分自身の素養を高めようという意欲を持つようになった。」(中国経済網 2016-12-18) [12]

一方で、都市部住民が、「農家楽」で、疲れた体を休め、心を癒し、田舎生活を楽しみ、さらに、農民との触れ合うことにより、長年来の農村や農民に対する偏見や差別、不健全な意識、見方を変えることにも大きく貢献した。

5.4. ますます利用しやすくなる休暇制度が充実する「農家楽」

中国全土での週休2日制度の実施が、「農家楽」への利用ニーズを増やしたという側面もあると考える。今までは、旅行に出かけようと思っても、仕事を休まなければならず、遠く離れている観光地までの交通手段も考えなければならないなど、色々な制限によりすぐに行動に移すことができなかった。しかし「農家楽」はほとんど都市部の近郊にあり、自家用車を使って、概ね二時間圏内で目的地に着けるように分布しており、気軽に出かけることができる。その気軽さもまた「農家楽」が選ばれる要因である。

5.5. 政府のバックアップ

冒頭でも記したように、中国政府のバックアップによって、いろいろな面からの支援が進められているので、農村における観光資源の開発も順調に進めることができた。これからもますます農業、農村の自然資源の合理的な利用と開発がよりよく進められることが期待されよう。

ここ数年来、農村の広い空間と農業自然資源、農村の人文景観資源と都市住民の自然への憧憬をうまく対応させ、多くの観光客を満足させてきたのは、ほかでもなく[農家楽]であった。

「農家楽」という新型観光は、以上の理由で、今後ともさらに発展の空間と余地があると筆者は考える。

6. 目下「農家楽」の発展における問題点および今後の課題

6.1. 経営方針と中身は変質した「農家楽」

「農家楽」が全国規模でしかもかなり速いスピードで発展をしてきたが、地域によって、その発展規模、投資、経営方針と中身は、それぞれ違いがある。

中国対外経済貿易大学の教授である李長安氏は以下のように指摘した。(李長安 2015-6-1)

「多種多様な「農家楽」はそれぞれの地元の特徴と地域の特色に基づいて興されたレジャー娯楽の場所が、消費者の多様なニーズに応えられる機能を持っている。目下「農家楽」の発展においては、直面しているチャンスもあればチャレンジもある。

問題点としては、レジャー娯楽用の製品の品質があまりよくない、種類が少ない、低いレベル

の重複開発現象が著しいという現実がある。観光活動の種目においては、たとえば郷土料理を食べたり、トランプやマーじゃんを遊んだり、釣りをしたりすることなど、皆が同じ調子で変化に乏しい傾向があり、類似現象が目立つ。さらに、基本的な受け入れ施設の建設が足らず、サービスのレベルも向上していない。」[13]

本来は、「農家楽」は「農村、農業、農民」という三農との関係が密接な業態である。「農」のニュアンスが強調された観光形態であり、さらに体験型の観光活動でもある。けれども、いつの間にか、農家の郷土料理を食べ、室内でマーじゃんをするだけの「農家楽」が各地に散見されるようになっていて、農民との交流の場や文化体験の場がないような「農家楽」は、明らかにその趣旨からは外れているといわざるを得ない。

6.2. 「農家楽」が過剰供給、自然資源の有効利用に問題

普通の生活の延長線で且家族単位で経営できる「農家楽」は、その性質上、参入障壁が低く、同じような「農家楽」が過剰供給される現象が起きている。例えば、4節目の中に触れたように一つの村に「農家楽」が500軒以上存在するという事例もあった。果たして本当に必要があるだろうか、思わずに疑問を抱いた。

環境保全や自然にかかる負荷を鑑みても、観光客の受け入れは一定水準に抑えるべきである。そうしなければ、過剰供給が過当競争を呼び、収益の悪化がサービスの低下を招く恐れがあり、ゆくゆくは「農家楽」の健全な経営状態を脅かす結果となる可能性があることは明らかである。

農村部にある「農家楽」の発展は、農村経済の活性化に積極的な役割を果たすことができるけれども、同時に別な面でのマイナスをもたらすこともある。例えば、村の自然環境への保護、限られた自然資源の有効かつ平等な利用について、きちんとバランスを取った配分となっているか、また疑問が残る。さらに、「農家楽」が発展することにより、周りの観光業に参与していない農民たちの日常生活には、道路の渋滞、車の排気ガスによる空気汚染、生活ごみの大量発生、静かな田舎生活に騒音が増えたり、美しい田園風景が人混みで殺風景な光景に変わってしまったたりするマイナス影響を受けている。

6.3 消費水準の設定に問題

最近、一部の「農家楽」の消費水準の設定に理性的ではなく、むやみに都市観光を模倣して、「農家楽」を高級レストランか高級料理屋のように演出して観光客を受け入れている。しかし「農家楽」を利用する観光客は、求めているのがそれではなく、精神的な充足感を求め、自然にできた生態環境の中でリラックスをしながら、楽しみたいという目的でそちらへ行くわけ（論文網2016-06-03）[14]なので、消費水準の設定に合理的でなければならない。尚、美しい自然環境の中で、高級レストランのような「農家楽」の出現は、望ましいとは思われない。

6.4 衛生管理に問題

昨今、懸念されているのは、衛生管理の問題である。厨房に、ハエや蚊、虫よけの設備、防塵設備などが整っていない「農家楽」が多数存在している。食器の消毒を厳しく行うところもあれば、いい加減なところもある。さらに、従業員の健康検診が定期的に行われているかという問題もあ

る。このような不備が存在する「農家楽」は、いずれが必然的に淘汰されていくのではないか。

新型観光の一つである「農家楽」の観光効果と問題点および今後の課題を考えるにあたっては、「そこに生じるプラス及びマイナスを全体として把握することが重要であり、諸効果が総合に関連し合っていることを認識するとともに、そこに生じやすいマイナスの効果を取り除く努力が必要である（前田勇 1978年 p. 58）」[15]ということ改めて感じさせられた。

7. 「農家楽」の持続発展を確保するために、以下六点を考えた

① レジャー農業と農村観光を盛んに広げるために、「農家楽」の更なる健全な発展をさせなければならない。そのために、まず必要な法整備と保障機構の設立が欠かせないと考える。

現時点では、地元行政からの指導と支援を得て、「農家楽」を運営する場合もあれば、すべて個人経営に任せ、野放し状態の例も数多く存在する。そのため、「農家楽」においては、管理の不行き届き、設備やサービスのバラつきなど、問題は数多く存在しており、法整備と受け皿となる行政機構や責任区分の明確化がこれら問題を解決する第一歩とであろう。

② 政府の支持のもとで、「農家楽」に対する管理、経営方針、サービスへの監督があれば、業界全体のレベル向上にもつながり、さらに、「農家楽」に対する長期的な経営方針、全体的な規模での企画推進も可能となる。将来的には中国人観光客だけでなく、外国人観光客の受け入れもできる「農家楽」をさらに増やせるように、必要な環境整備と宣伝が必要である。日本の金丸弘美氏による以下のような指摘がある。「海外のインバウンド事例を見ると、農村で宿泊するB&Bや一棟貸しは、すでに広く普及をしている。特に有名なイタリア、フランス、イギリス、ドイツなどでは、農家の宿泊は各国2万軒近くあり、景観、特産品、ツーリズム、長期滞在を活かした農業との複合体系で、山村でも十分な経済をもたらしている（金丸弘美 2017年 p 90）」[16]この点については、中国の「農家楽」はまだ発展途上の段階にあり、改善点がたくさん残っていると筆者も考える。

③ 地元の特徴を掘り出し、それを最大限に活用した「農家楽」のブランド作りに力を入れ、その知名度を高めることも大事だ。普通の観光であれば、食事、宿泊、娯楽、ショッピング、交通などの要素を整えば観光客はひとまず納得するであろうが、「農家楽」を利用する観光客にとっては、それだけでは物足りないであろう。

「農家楽」に行く観光客は、一般的な娯楽で満足するのではなく、特色ある農村ならではの「経験」をすることを求めている。農村の風光明媚な田園風景と素朴な地域文化の体験を取り入れた観光プログラムの提供が必須であり、農業文化を少しでも学びたい、その地方の民俗風習を知りたい、農民と触れ合いたい、農作業を体験したいといったニーズに応えられるような「農家楽」にしていかなければならない。訪れた観光客がそのような文化的意義のある「農家楽」の体験により、特色がある農村生活の魅力と楽しさが伝われば、今、提唱しているレジャー農業と農村観光はますます発展するものと考えている。

④ もっとも重要なことは、そこに美しい自然と良好な環境があるということであり、それが「農家楽」の持続発展の可能性の確保に繋がる。従って限りある自然資源を合理的に開発し、有効的に利用することが新型観光の「農家楽」にとっては、何よりも重要であり、強いて言えば死活問題なのである。しかし残念ながら、「農家楽」の経営者は、たいてい地元の農民であり、そ

の中に必要な教育を受けていないため、環境に対する問題意識が薄い経営者も数多くいるのが現状である。

⑤ 良好な生態環境、豊かな自然資源、豊富な人文資源と社会資源を守る意識をしっかりと持つように農村観光業に携わる関係者に対する啓蒙、指導制度を整えることが急務である。また衛生管理に対する意識も希薄になりがちで、今すべての「農家楽」が提供された食品と宿泊の環境については、安心安全な状態に置かれているとは言い難い。

従って、「農家楽」の持続発展をさせるために、地元行政による「農家楽」の経営者に対する安全と衛生に関する知識の普及と教育も不可欠である。

さらに、観光業として発展させていくためには、郷土文化の素養を持ち、農村生活についても知見のある人材の育成も重要であり、これらが行われて初めて、「農家楽」は更なる発展を遂げることができる。

⑥ 時代発展の流れに適応できる情報通信環境の建設にも努力しなければならない。インターネットを活用し、「農家楽」に関する諸種情報を提供し、速やかに観光客にキャッチしてもらえるかどうかは、「農家楽」の持続的に発展することとも繋がっている。「全国的なネットワーク組織を作り、国内はもとより、海外からの訪問者にも確かな情報手段によって紹介できるような体制作りが求められる（青木辰司、2010年 p.89）。」[17]ということが必要になる。

8、終わりに

中国の田舎には美しい山と川に恵まれている「農家楽」が数多く存在してある。小論は7つの面から新型観光の「農家楽」について考察した。目下中国の都市住民の週末・休暇及び祝祭日に行く観光の目的地の70%以上で、周辺の農山村が選ばれている。そしてその多くの観光客が「農家楽」を利用している。「農家楽」という新進の観光形態は、第一次産業に偏重している農村の産業構造の改革に寄与し、地元農民の収益を高め、中国の農村経済の社会への発展に積極的な役割を果たしている。発展途上の業態にあり、今なお様々な問題と困難は存在しているが、いずれ、それを解決、克服しながら、今後も発展を遂げていくものと考えられる。

「農家楽」は、あくまでも「農」を基にして発展していかなければならない。自家産の野菜、果物、米、自宅の庭、池、田んぼと畑を利用し、観光客を魅了することに真摯に向き合い、工夫と努力をすれば必ず成功に繋がろう。また、「農家楽」は、農村の特色ある家庭的な雰囲気を訪れた観光客をもてなし、農民の素朴さや親切さを以て都市住民を感動させることが目的であり、観光客はこうした色々な体験により都市部での生活にない楽しさを知り、農村文化に対しての理解を深める。これこそが、中国における新型観光である「農家楽」の目指す姿である。

参考資料

- [1] 新華社、新華網 2017-04-11 www.zjxinhuanet.com

- [2] 農業部部長韓長賦氏の「全国レジャー農業と農村観光」をテーマとした会議での講話
2017-4-11
- [3] 光明日報 2017-04-12
- [4] 馬誉峰氏の「全国人民代表大会での発言」 2017-03-08 www.weibo.com
- [5] 湯麗敏「観光業における民宿産業の持続発展の可能性に関する考察」 富山国際大学紀要
第9巻 p 133～140 2017年
- [6] 「三農中国」報道「農家楽」をレジャー農業と農村観光の方向に転換させる」
2015-6-1 www.onethinktank.com
- [7] 多方一成『グリーンライフ・ツーリズムへの創造』 p 37 芙蓉書房出版 2013
- [8] 宮崎猛『日本とアジアの農業・農村とグリーン・ツーリズム』 p129 昭和堂 2006年
- [9] 『携程攻略』 2014-10-20 you.ctrip.com/travels/changxing1832/2148550.html
- [10] 中国浙江省長興県水口郷顧渚村山景区に所在「世外茶園農莊」という「農家楽」
- [11] 中国新聞網 2018-1-19 www.chinanews.com
- [12] 中国経済網 2016-12-18 「農家楽産業の持続発展の可能性への道探索」
www.hlbenjl.com/news/10.html
- [13] 「三農中国」報道「農家楽」をレジャー農業と農村観光の方向に転換させる」
2015-6-1 www.onethinktank.com
- [14] 論文網 2016-06-03「农家乐観光の持続発展の可能性についての分析」 [www.lunwendata.com/
thesis/2015/75154.html](http://www.lunwendata.com/thesis/2015/75154.html)
- [15] 前田勇『観光概論』 p58 学文社刊 1978年
- [16] 金丸弘美『田舎の力が未来をつくる』 p 90 合同出版 2017年
- [17] 青木辰司『転換するグリーン・ツーリズム広域連携と自立をめざして』 p 89 学芸出版社
2010年